

四国地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小 原 淳

I. はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている。本稿では四国地方に存する5件の事例を取り上げる⁽¹⁾。紙幅の都合から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。また、日付は陽暦で表す。

II. 四国地方に存する史跡・史実

(1) フィヒテと新しい日本⁽²⁾

敗戦後、上原専禄 (1899-1975) や丸山真男 (1914-96)、あるいは文相の前田多門 (1884-1962) など、ドイツの哲学者フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte 1762-1814) に倣って祖国復興の道を説いた人は多い。そうした一群の文化人の中心に、四国出身の二人の東大総長がいる。

一人目の南原繁 (1889-1974) は、香川県大内郡相生村 (現在の東かがわ市) の零落した名家に生まれた。非凡な学才と母の献身によって一高を経て東京帝大に進み、その過程で新渡戸稲造 (1862-1933) や内村鑑三 (1861-1930) の薫陶を受けて、キリスト教信仰に目覚める。1914年に大学を卒業し、内務省に入省、1917~19年に富山県射水郡の郡長を務め、1921年から東京帝大法学部の教員に転じた。

南原は1921年にヨーロッパに留学し、ロンドンで七ヶ月を過ごした後、1922年5月から1924年1月まで、ベルリンでカント (Immanuel Kant 1724-1804) の研究に打ち込んだ。仏英米を経て7月に帰国、翌年8月に教授に昇任するも同月に妻が他界、1926年に再婚するが、周囲から「洞窟の哲人」と呼ばれたように、研究と信仰に没入していく。

言論統制が厳しさを増し、四・一六事件 (1929)、共産党シンパ事件 (1930)、滝川事件 (1933)、天皇機関説事件 (1935)、さらに東京帝大経済学部で後述する矢内原事件 (1937)、法学部で津田事件 (1940) が続く時勢にあって、南原はフィヒテ研究に向かい、そして徐々に「洞窟」から脱していく。1942年、初の単著『国家と宗教』を発表、カントの「永久平和」の理念を「最高善」とみなし (227頁)、キリスト教を中心とした「ヨーロッパ的伝統からの決定的離反の方向にある」ナチ・イデオロギーは、「前大戦に敗れたドイツが当初一つのゲルマン国家を形成するためのイ

デオロギーとしては役立ち得たとしても、あまねく今後の新しいヨーロッパの原理としては不適当なものがある」(313頁)と喝破した同書は、国粹主義者の蓑田胸喜(1894-1946)から批判を受けるも、初版の5000部がたちまち売り切れたという。また、丸山らを指導したのも、このころである。

東京大空襲の前日にあたる1945年3月9日、南原は「意を決して」法学部長に就任、同僚とともに、重臣や軍幹部を相手に終戦工作を試みた。そして12月に戦後初の総長に推薦され、1951年12月まで務めた。

1946年2月11日、敗戦後に初めておとずれた紀元節の日に、南原は占領軍によって禁止されていた君が代を東大の正門に掲揚し、「新日本文化の創造」と題する講演を行った。南原は軍国主義者や国家主義者の欺瞞と恫喝、軍閥や官僚の無知と野心が「現在の破局と崩壊」をもたらしたことを批判するが、責任の一端は「一個独立の人間としての人間意識の確立と人間性の発展がなかった」国民自身にもあるとする(『著作集』7頁)。そして、日本人が自立性をもたないのは、日本がルネサンスによるヒューマニズムの成立を経験しなかったからだと論を進める。しかし、彼は1946年1月1日に発せられた「新日本建設に関する詔書」、いわゆる天皇の人間宣言に、ルネサンスにも通じる意義を見出す。この詔書は日本神学と神道的教義からの天皇の解放を意味しており、「ここに初めて、わが国の文化がわれに特殊なる民族宗教的束縛を脱して、広く世界に理解せらるべき人文主義的普遍の基礎を確然と取得したのであり、国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成し得る根柢を、ほかならぬ詔書によって裏づけられた」(8頁)のである。

ここで日本にもう一つ必要なのは宗教改革、つまり従来の宗教に代わる新たな信仰の獲得である。ドイツの復興はナチ精神の清算と、ルターやカントらの精神への回帰が成功するかどうかにかかっているが、日本も「新たな国民精神の創造」に取り組み、「内的な知的＝宗教的な精神革命」を実行して、「昭和維新」を達成しなければならない(11頁)。

しかしこの革命は、単に日本の変革にのみとどまってはならない。日本人は戦中の自己犠牲の心をもう一度取り戻し、自らの生命を「祖国を通して世界人類のために献げ」るべきであり、そのためには、古来の自国の伝統を踏襲して、積極的に外国文化を摂取しつつも「外国的なものの単なる模倣ではなく、ついにこれをわが国民精神の生命に融合せしめる」必要がある(11-12頁)。そしてこの変革は連合軍の指令に先んじて、「わが国民自らの手によってなすべき」であり、「日本神学と国家主義」が倒壊した今、新たな精神と思想は「功利主義思想とその兄弟である唯物論的無神論」に抗して展開されるべきである(13-15頁)。

南原は、以下の言葉で演説を締めくくる。「われわれは今日をもって記念し表徴せられるわが建国の神話と歴史に盛られた意味——われらの遠き祖先の懐抱した理想を思い、ことに身躬(みづか)ら衆に先んじ昭和維新の精神的革命の範となり給うた皇室を戴き、古き伝統に新しき精神を接木して、わが民族の真の永遠性と世界における神的使命を見出し、一致団結して新たな「国

生み」——新日本の建設と新日本文化の創造に向かって、堅き決心をもって邁進しようではないか。しかるとき、詔書に示し給うたところのわが国民の『至高の伝統に恥じざる新たな真価を発揮する』ことができるであろう」(16-17頁)。

強烈な愛国主義、日本国民の独自性の自明視、知的・精神的陶冶の推奨、個の確立の尊重と利己主義への警戒、変革への志向と伝統への回帰、民族意識の高揚が世界平和と国際貢献とに繋がるという信念、占領者とその追従者に対する反発といった、南原の講演を構成する要素はいずれも、フランス占領下のベルリンにおいてフィヒテが行った講演「ドイツ国民に告ぐ」を彷彿させる。しかし南原はそこに独自の要素、すなわち人間天皇への共感を接続し、天皇を頂点に戴く日本民族の新たな「国生み」を思い描いた。

貴族院議員として参加した5月の第90臨時帝国議会で、南原は国民による自主的な新憲法の作成、日本民族の本質である君民同治の伝統への回帰、自衛権の正当性を唱えた。こうした主張は先に見た紀元節の演説、そしてその深層を成すフィヒテ理解の延長線上にあるものとして理解できよう。彼はその後、アメリカの意を受けた再軍備に反対し、憲法九条の擁護に回る。しかしこれは、当初は「正義にもとづく平和」に供じるはずのものだった自衛権が、冷戦の激化を助長する手段と化しつつあるという判断に基づいた選択だった、つまり、少なくとも当人の意識としては、変わったのは国際情勢と日本の立場のほうで、南原が自らの学を曲げたわけでも、世に阿ったわけでもない。

1950年に退官した南原は、学士会理事長や日本学士院院長を歴任した。1957年に故郷で心筋梗塞に襲われて九死に一生を得た後、『フィヒテの政治哲学』(1959)を刊行し、ライフワークであったフィヒテ研究を完成させた。

二人目の矢内原忠雄(1893-1961)は、愛媛県越智郡の富田村松木(現在の今治市)で、曾祖父の時から医術を稼業とする「代々の愛媛県人」の家に生まれた。父は京都療病院でドイツ人やオランダ人に学んだ、同地で初の西洋医だった。神戸中学校などを経て一高へ進学、南原と同じく新渡戸や内村に感化され、キリスト教信仰を深めた。

東京帝大を卒業した矢内原は1917年4月から別子鉱業所に就職、新居浜に赴任した。翌月に結婚、新居浜での生活は「生涯中最も記憶せらるべき三年間」、「多忙にして幸なりし生活」だった。1920年3月、前年に新設された東京帝大経済学部の助教授に就任する。10月から留学、10ヶ月のロンドン滞在の後、翌年9月にドイツに移り、ベルリン郊外のダーレムに下宿した。1922年5月には南原がベルリンに来て、近くに住んだ。1922年8月からパリに移り、1923年2月に帰国するが、その直前に妻が他界している。

帰国後の矢内原は植民政策学の講義を担当し、この分野の第一人者となる。自主性を獲得した植民地と宗主国の平和的な国際共同体の実現が、彼の理想だった。他方で1925年に帝大聖書研究

会を創設、1930年に内村が死去すると、その後を継いで伝道や執筆、講演、ハンセン病療養所への慰問を積極的に行った。しかし、蓑田胸喜による批判を契機に文部省や警察、軍人などから攻撃を受け、学内でも糾弾されるようになった矢内原は、1937年に大学を辞職する。その後は月刊誌『嘉信』の発行や集会をつうじた活動を続け、「民族の預言者」（赤江達也）の自覚をもって日本の戦争を批判、度々発禁などの処分を受けた。

1945年11月28日、矢内原は東京帝大に復学、「植民政策」の講座名を変更した「国際経済論」を担当することとなる。その直前の時期、彼は10月2日に長野の木曽福島国民学校、11月6日から東筑摩郡広丘国民学校で教師たちに向けて講演を行い、その内容は翌年6月に岩波新書の第100冊目として刊行された。

10月の講演で本居宣長（1730-1801）を取り上げて日本精神の長所と短所を論じたうえで、宣長の「本（もと）つ国という選びの思想」とキリスト教思想の類似性を指摘し、キリスト教信仰が「日本の国体を……一層美しく又一層確実なものとする事が出来ると思ふ」（『日本精神と平和国家』57-58頁）と述べた矢内原は、11月の講演「平和国家論」で、全面的にフィヒテを取り上げている。同講演は冒頭でフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』の概略を紹介し、フィヒテとナチズムの思想的な相違を論じてから、「フィヒテがルッターを誇りベスタロッチを誇るならば、我々も日蓮を誇り親鸞を誇り中江藤樹を誇ることが出来るだらう」と述べ、「戦争責任者の追究と、何でもかでもアメリカの仰言る通りに、わけが解つてゐるのか否か知らないけれども凡て民主主義化しようとする事と、食べ物的事」よりももっと大切なこと、すなわち民族の文化と精神の伝統を継承しつつ、「私共の子孫が将来如何なる国民になるかを決定」しなければならないとする（78-79頁）。その後、矢内原はいったんカントの永久平和論に話を移してから、確立された「個」をもち、フィヒテが説いたように占領者に「日本人の徳を示」しう、「平和人」としての日本人を造ることを、「新しき教育の目標」とする。なお、「二千六百年の歴史的背景の中で之こそ日本的な徳であるとして示し得るものは、忠君愛国の精神」である（88-94頁）。さらに矢内原は、そうした人間から成る平和国家の実現を理想に掲げ、「平和国家の信念と生活が日本人の伝統と歴史の中に……必ず見出される」と述べる（108頁）。そして、新たな日本人が造られ、彼らが平和国家を実現するにあたっては、「今日迄の基督教に対する無理解な反感と弾圧の態度を捨てまして、謙虚に此の教を受けるといふ態度こそ日本の望み」となる。

矢内原の論調が南原、そしてフィヒテのそれに酷似していることは明らかだが、最後に矢内原は自らをフィヒテ、会場の広丘国民学校をベルリン大学に重ね合わせ、聴衆に「日本国新生の為に御奮闘下しますやう」願いつつ、講演を締め括っている（116-117頁）。

矢内原はその後、南原総長の下で社会科学研究所所長、経済学部長、教養学部長などを歴任、そして1951年12月に南原の後を継いで東大総長となり、1957年12月まで大学改革に尽力した。矢内原自身の言葉では「南原総長はいわば家康公みたいなもので……私の位置は二代將軍秀忠、

大内兵衛（1888-1980）の評では「南原君はいわば攻勢軍のキャプテンに適した名ピッチャーであり、強打者」、「矢内原君は守備の方が上手でキャッチャーの名手」、「決して敵の盗塁を許さない」存在だった。

ともにキリスト教を信仰し、ドイツで学び、戦前の軍国主義化に対しても戦後の急激な民主化に対しても節を曲げず、ナショナリズムと平和主義と戦後天皇制を理想視し、そしてフィヒテに自らを、自己変革によって敗北を乗り越えたドイツの過去に日本の未来を重ねるこの二人によって、戦後の東大、そして日本の学術と教育の基本路線は定められたと言える。

(2) ドイツ人捕虜研究のこれから⁽³⁾

第一次世界大戦中に青島と南洋諸島での戦役で捕虜となった同盟国の将兵4715名のうち、青島周辺で死亡した7名やヤップ島で宣誓解放された9名などを除くと、4697名が日本の収容所に収容された。当初、収容所は東京、静岡、名古屋、大阪、姫路、徳島、松山、丸亀、大分、福岡、久留米、熊本の12ヶ所に設置されたが、1915年9月以降、習志野、名古屋、青野ヶ原、似島、板東、久留米の6カ所に統合された。

既に相当な研究の蓄積があるこのテーマに関して、限られた紙幅のなかで新たなことを書き加えるのは難しいが、さらなる考察が可能と思われる点を幾つか列挙したい。第一に、今なお未解明な点が多い各収容所についての調査が進めば、最も研究が進んでいる板東収容所——捕虜への人道的な措置で知られ、「模範収容所」と称されることもある板東は、駐日アメリカ大使の助言を受けて大戦末期の1917年4月に設立されており、設立の経緯も稼働期間も例外的である——をベースにした従来の理解を補正しうる。

その板東建設の契機となったアメリカ大使館員ウェルズ（Benjamin Sumner Welles 1892-1961）による1916年3月の調査は、ドイツ政府の依頼を受けて行われたもので、捕虜の待遇や収容所の環境の点から、丸亀、松山、名古屋、習志野、大分、徳島が上位、青野ヶ原、福岡（前所長の時期は下位）、静岡が中位、久留米、大阪が下位に位置づけられた。またジーマンス・シュッケルト社の東京支社代表も同様の調査を実施しており、そこでは久留米、松山、福岡、丸亀、静岡の評価が低い。とくに捕虜から後年に「日本のKZ」と呼ばれた久留米の場合、一人当たりの居住面積が習志野の1/3程度と狭く、所長の真崎甚三郎（1876-1956）や林銑十郎（1876-1943）の下、厳罰主義が取られていた。真崎は、自身も捕虜殴打事件も起こしている。

もっとも、敵国の捕虜への対応に監視と管理、規律と強制、馴致と処罰がつきまとうのは、久留米だけの問題ではない。全収容所を総計すると、懲役・禁固・拘留などの措置が90件、収容所内での懲罰が2665件あり、そのうちの2072件が初犯、つまり約44%の捕虜が一度は何らかの処罰を受けている計算となる。また、捕虜の逃亡事件も各地で起こっており、好環境だった板東でも2件の事例が記録されている。

第二に、捕虜間の相違や対立にもより注意が払われるべきである。まず、ポーランド人やエルザス＝ロートリンゲン出身者、あるいはイタリア人やチェコ人、ハンガリー人、クロアチア人、スロヴァキア人などを含むハプスブルク君主国の兵士といった、「特殊（特種）俘虜」の存在が重要である。彼らの多様な民族的出自が原因で、捕虜どうしの暴力沙汰が発生することもあった。こうした非ドイツ系捕虜を中心とする宣誓解放者は、約250名にのぼる。

ユダヤ人問題の分析も、今後の課題の一つとなろう。9名のユダヤ人がいた板東では、収容所内で捕虜が発行していた機関紙『バラック』に、「軍が西部戦線で圧倒的に不利な戦いをほぼひるまずに続けているというのに、銃後で激しい炎が燃え上った」、「我々にとって外敵は取るに足らないだろうが、内部での戦いは激しい」、「我々を打ち負かしたのは敵ではなく、自分たちの争いである」などと、いわゆる「背後からの一突き論」が展開されている（Nr. 64, 1918.12.15）。

また、政治志向をめぐる対立があったことも推測される。例えば1917年7月19日に交渉による講和を求める「平和決議」がドイツ帝国議会で可決された際に、『バラック』編集部は「城内平和」を訴え、紙上で論争を回避する旨を読者に宣告しているが、これは捕虜たちの間で政治談議が過熱したことを受けての対応だった（Nr. 26, 1918.3.24; Nr. 27, 1918.3.31）。

第三に、日清戦争や日露戦争、日中戦争、太平洋戦争の捕虜収容や、関東大震災の際の外国人収容など、前後の類例との比較検討も求められる。例えば日露戦争では7万2千人の捕虜が日本各地の29ヶ所に収容されたが、それらの施設は10年後のドイツ捕虜の収容所と重なっている場合が多い。久留米の場合、最大で2829人のロシア人捕虜が収容されていたが、1905年11月26日には捕虜による放火事件が発生し、バラック8棟などが消失、8名が熊本の監獄に収監される事件も起こっている。こうした経験との関係、さらには後年の捕虜虐待や強制労働との連続と断絶を問うことで、第一次世界大戦期の捕虜収容の特性がより明確になるだろう。

第四に、民間人を対象とした強制収容所までを視野に入れた、グローバルな同時代比較も重要であろう。当該期はハーグ条約で戦時国際法が成文化され、捕虜に対する人道的措置の原則が確認されたが、その反面でボーア戦争やヘレロ・ナマクア虐殺で使用された初期の強制収容所、アルメニア人迫害の場となったデリゾール収容所、ドイツ兵捕虜からアイルランド人の収容へと転用されたフロンゴッホ収容所、フィンランド内戦の際の収容所など、20世紀初頭の捕虜収容の暴力化には、後のさらなるエスカレートを予期させるものがある。日本の事例をこうした世界的な動向と無縁なものとして捉えられるかどうか、慎重な検討を要する。

なお、第一次世界大戦で生じた捕虜は両陣営を併せて700～800万人に達し、250万人がドイツ、290万人がロシア、72万人が英仏の管理下に置かれた。そのうちドイツ人捕虜が収容された施設は、日本以外にも中国に8、イギリス統治地域に4、オーストラリアに8、インド・ビルマ・セイロンに10、ロシアに51ヶ所ある。

第五に、日独交流の契機として語られることの多いこの出来事だが、史料の随所に両者の意識

のずれが散見される。有名な、板東の捕虜たちによる『第九』の初演を例にとれば、後に大阪外大教授となったボーナー (Hermann Bohner 1884-1963) が、翌日の『バラッケ』紙上で以下のように述べている。「我々には、自由を求める偉大なる闘争時代の人々の語りに耳を傾けた誰もがかつて聞いた声が、聞こえてくる。ヘルダーリン、ノヴァーリス、ケルナー、アルニム、アイヒェンドルフ、ブレンターノ、彼らがこぞって語ったものが、アダージョ・モルト・エ・カンタービレで歌われる。そしてまた、彼らにはいずれも、勝利なき者の内なる悲哀の響きがある。……ただ一つの英雄的な民族だけが、喜びを失った影を払いのけ、輝かしき道を切り拓く」(Nr. 36, 1918.6.2)。ここに吐露されているのは、解放戦争を出発点とするドイツ性への愛着や、敗北を乗り越えようとする熱情ではあっても、日独の兄弟愛などではない。

青島に「模範植民地」を築いたと自負し、義和団事件に際して「懲罰遠征」という名の大量虐殺に加わった者もいたドイツ人捕虜のなかには、東洋に対する西洋の優越を自明視し、日本人を「ジャップ」や「猿」と呼ぶ者がいたし、収容所内で作成された機関紙『バラッケ』には「野蛮なアジア」(Nr. 48, 1918.8.25)といった表現も登場する。また、日本陸軍の近代化に貢献したプロイセン軍人メッケル (Jacob Meckel 1842-1906) の子孫を自称する捕虜——実際には、直接の繋がりとは確認できない——が、故国に送った手紙のなかで日本人の忘恩を批判しているように、ドイツ軍は「教師」で日本軍は「教え子」、日本軍はドイツ軍の「安っぽい模倣」といった発言もあった (Nr.9, 1917.11.25)。

他方で、例えばドイツ本国の家庭雑誌『ガルテンラウベ』に掲載された、熊本の五高教師デュットナー (Sophie Büttner 1868-?) の体験記には、青島での戦闘は名誉あるものではないとする日本の高官の発言、日本人の同僚が彼女の手をとりつつ述べた慰めの言葉、青島陥落の時に隣家が国旗の掲揚を遠慮したこと、日本人から様々な贈り物が届けられたことなどが紹介されている (1915, Nr. 45)。日独の「友好」は、ドイツ側の優越感や恨みと日本側の劣等感や疚しさが歯車のようにかみ合うことで成立していた側面はないだろうか。

第六に、捕虜と現地住民との交流にも再考の余地がある。音楽会やスポーツの親善試合、所外労働、橋作りや公園整備への捕虜の協力、技術や知識の教授、美術工芸展覧会など、両者が接する機会が少なくなかったこと、その際に多くの人々が相手方に善意と好奇心を抱いたことは否定しない。しかし、青島の戦いで日本も500名程の戦死者を出し、各地——とくに静岡県や熊本県に多く残っている——に「日独戦役」の慰霊碑が建立され、「日清戦役」、「日露戦役」とともに追悼されたことが、地域住民の感情に与えた作用は看過できない。

また、収容所と地元の経済的関係も考慮に入れる必要がある。収容所が置かれた地域は食糧や衣類、生活物資、医療品、酒・タバコ類などの収容所への納入、施設の賃貸、さらには捕虜と住民が直接行う闇取引などによって、相当な利益を得た。そのため、収容所の誘致運動を展開した地域もある。丸亀を例にとれば、酒保での購買額だけで約325万7千円、これに准士官以下の食

費を加算すると547万4千円に達する。庶民と捕虜との関係に権力や規則は介在しなかったとしても、算盤勘定が無縁だったとは考えにくい。

第七に、民間人として捕虜の家族や日本滞在者の待遇、彼らと捕虜との関係をより詳細に分析すべきである。先述のビュットナーの場合、開戦当初の6週間は警官の護衛と監視の下に置かれ、ドイツ本国からの情報の流入が不十分で、イギリスの報道の一方的なドイツ批判に憤りつつも、敵国民であるため、思うように反論ができなかったことを回想している。また彼女は、熊本の収容所を慰問し、捕虜と文通したり、犬の飼い主を探してやったり、書籍や楽譜を差し入れたことも記録している。ビュットナー以外にも、支援金を募って各収容所に送金した人々は少なくない。

戦時下のドイツ人民間人が悲劇に見舞われた事例もある。1917年2月24日に福岡で起きた「フォン・ザルダーン事件」では、一ドイツ帝国海軍相フォン・カペレ（Eduard v. Capelle 1855-1931）の娘で、捕虜の妻だった女性が強盗殺人の被害者となった。その知らせを受けた夫の海軍大尉ザルデルン（Siegfried v. Saldern ?-1917）は、収容所内で自殺している。

以上の諸点にぐわえ、ドイツ領ニューギニア出身の捕虜の問題、『バラッケ』紙にも頻出するヒンデンプルク（Paul v. Hindenburg 1847-1934）への崇拜、同紙で展開されたバルト地域への入植論などの論点も挙げられる。新史料の発掘、研究の視点と手法の拡大、研究機関や自治体間の連携の強化が期待される。

（3）麻薬が繋ぐ日独関係史⁽⁴⁾

日本の近代薬学の父と称される長井長義（1845-1929）は、阿波徳島藩の城下に生まれた。長井家は初代藩主の時から代々典医を務めており、本人も十代の半ばから父の代診を担当した。1866年に藩命を受けて長崎に留学、ここで医学を離れ、薬品の製造などを学ぶようになった。

1868年から大学東校に転学、1871年に第一回の国費留学生に選ばれて、プロイセンに派遣される。2月12日に横浜を出港、米英を経由して4月9日、創設から間もないドイツ帝国に到着、ライン川を渡る際にドイツ兵を目にして、「強ソーニハ不見、皆百姓ノ看ヲ為ス。此度ノ勝ハ全ク兵卒ノ強キニハ非ス、大将ノ善キ故ナラント思フ」（1871年4月9付書簡）と記しているのが興味深い。

翌年からベルリン大学に所属し、有機化学の大家ホフマン（August Wilhelm v. Hofmann 1818-92）の下で薬学を学ぶ。ホフマンの弟子にはジョン万次郎（中浜万次郎、1827-98）の息子の中浜東一郎（1857-1937）、柴田承桂（1850-1910）、松本銈太郎（1850-79）もおり、またタウベン・シュトラーセン15番地の下宿では青木周蔵（1844-1914）や品川弥次郎（1843-1900）、鷹司熙通（1855-1918）、松崎万長（1858-1921）、武者小路実世（1852-87）、桂太郎（1848-1913）らと同宿だった。長井は1879年からホフマンの助手に任命され、翌年に学位を取得、またホフマンから

ドイツ人女性テレーゼ（Therese Nagai 1862-1924）を紹介されて、後に結婚した。

日本の医学・薬学界ではこの頃、外国人教師に代えて自国の人材を指導者に迎えようという意向が強まり、長井にも帰国の要請が繰り返されたが、本人は研究に没頭して求めに応じず、ドイツ滞在は13年に及んだ。長期のドイツ暮らしを経験した長井は、後に獨逸学協会学校の校長や、日独協会の創設時の理事長も務めている。

1884年に帰国した長井は東京大学教授、内務省御用掛、衛生局東京試験所長、中央衛生会委員などに着任した。また、大学での研究成果を技術移転して自他に益をもたらす事例を留学中に見聞していた彼は、大日本製薬会社製薬長を兼任し、日本における産学官連携に先鞭をつけた。さらに富山薬専などの官立化、徳島高工の製薬化学部設置に貢献するだけでなく、妻とともに女子教育の拡充にも尽力、日本女子大学校の「香雪化学館」にドイツ式の実験設備を設置し、女性として初の帝国大学入学者となった栄養学者の丹下梅子（1873-1955）らを育成した。妻テレーザは、1922年アインシュタイン夫妻（Albert Einstein 1879-1955, Elsa Einstein 1876-1936）が来日した際に通訳を務めた功績もある。また、息子の亜歴山（1877-1966）は外交官となり、1926年からドイツに赴任した。1927年にドイツを再訪した長井は、ドイツ薬学会名誉会員に推挙されるとともに、独逸国赤十字第一等名誉章を贈られた。またこの時、大統領のヒンデンブルクやシュトレゼマン（Gustav Stresemann 1878-1929）とも面会している。

薬学者としての長井の世界的名声を確たるものにしたのが、1885年のエフェドリンの発見である。エフェドリンは麻黄から単離抽出され、瞳孔散大や血圧上昇の作用がある。1924年には中国医学科学院の陳克恢（1898-1988）らによって、気管支喘息の発作を抑制するのに有効であることが明らかとなり、こんにちも市販の風邪薬に配合されて、世界中で使用されている。

しかしまた、エフェドリンからはメタンフェタミン、すなわち覚醒剤が製造される。1937年、ドイツのテムラー社が人口化合物プロピオフェノンからエフェドリンを抽出し、さらにそこからメタンフェタミンを製造することに成功、翌年から「ベルビチン」の商標名で流通するようになった。日本では、1941年から「ヒロポン」の商標名で販売される。

このベルビチン、そしてヒロポンと軍隊の関係については、熊野直樹の研究がある。8時間もの覚醒効果があるベルビチンは、1939年9月のポーランド侵攻や1940年5月のフランス侵攻に際して、運転手やパイロットなどの夜間勤務のために、ドイツ国防軍で使用されるようになった。さらに、モルヒネとの混合薬の投与も行われるようになり、1940年12月までに2800万錠のベルビチンが兵士たちに配給されたという。有害性を危惧する関係者たちの働きかけで、1941年6月に阿片法が改定されて非合法化されるが、国防軍は使用を継続した。また、軍隊での広範な使用のための試験として、強制収容所での人体実験も行われた。

麻黄の原料は、日本の支配下にあり、また多数のドイツ企業が進出していた内モンゴルであった。テムラー社によって人口化合物からベルビチンが製造されるようになって、ドイツによる

麻黄の輸入は続き、日独が経済面で協力し合う材料ともなった。

日本軍においても、パイロットの「夜間視力増強」のためにヒロポンが投与されことはよく知られる。戦争のなかで生み出された麻薬禍は戦後に拡大し、1951年に覚せい剤取締法が制定された後も、その違法使用は撲滅されていない。

(4)「土地なき民」たちの合作映画⁽⁵⁾

「ゲイシャ」や「ハラキリ」、「フジヤマ」といったステレオタイプとは異なる、真の日本像を海外に伝えようという思いは、日本映画界に黎明期からあった。関東大震災の後、そうした気運は現実味を帯び出し、1924年には旅行作家・映画監督のハイラント（Karl Heiland 1876-1932）が来日して、賀古残夢（1869-1938）との初の日独合作映画「武士道」が撮られた。

しかし日本映画の恒常的な輸出は実現せず、異国趣味による日本の曲解は解消されなかった。30年代には国際観光局（1930）や国際文化振興会（1934）、国際映画協会（1935）などの公的機関が設置されて、映画を通じた日本文化の国際発信は官民共通の取り組みとなり、世界的画家の藤田嗣治（1886-1968）が監督した作品——海外上映は実現しなかった——が撮影されたり、外国の著名な監督を起用した合作映画の製作が試みられた。その成果の一つが、1937年の映画「新しき土」（独語の題名は「侍の娘 Die Tochter des Samurai」）である。この作品については瀬川裕司の研究が詳しい。

「新しき土」の企画・製作・配給を担当をした映画製作者・輸入業者の川喜多長政（1903-81）、かしこ（1908-93）夫妻は、ナチ政権成立前の1930年から日独の協働を模索しており、1934年、山岳映画の第一人者であるドイツ人監督、ファンク（Arnold Fanck 1889-1974）に話をもちかけた。多くのヒット作を飛ばしていたものの資金難に陥っており、またナチ党への入党を拒否したことや、ユダヤ系の映画人に関係していたことで体制から疑惑の目を向けられていたファンクは、このオファーを快諾する。その後、ドイツ政府からの出資も得られる運びとなり、撮影技師アングスト（Richard Angst 1905-84）、第一次世界大戦中に日本に抑留された経験をもつマネージャー役のハック（Friedrich Hack 1887-1949）、俳優のエヴェラー（Ruth Eweler 1913-47）らがドイツ側のメンバーとなった。なお、北海道などに作品が残るスイス人建築家ヒンデル（Max Hinder 1887-1963）が通訳としてファンクを助け、教師役で出演もしている。

日本側の監督を務めたのは、愛媛出身の伊丹万作（1900-46）——息子の十三（1933-97）の最初の妻は川喜多夫妻の娘、和子（1940-93）——である。主役には小杉勇（1904-83）、そして16歳の原節子（1920-2005）が抜擢され、共演者に早川雪洲（1886-1973）らが名を連ねた。音楽は山田耕筰（1886-1965）、主題歌の作詞を北原白秋（1885-1942）と西條八十（1892-1970）、スクリーン・プロセスを円谷英二（1901-70）が担当した。

ファンク一行は1936年2月8日に来日、二・二六事件に遭遇するハプニングもあったが、富士、

蔵王、北海道、京都、瀬戸内、別府、阿蘇、宮島、浅間、上高地、茨城、東京など日本各地で10月まで撮影を行った。翌年2月、編集作業を終えたファンクが帰国する。なお、本職が武器ブローカーで日独の軍部とパイプのあったハックは、映画とは別の密命を帯びており、11月の日独防共協定締結を仲介したが、ソ連のスパイであるゾルゲ（Richard Sorge 1895-1944）の正体を見抜けず、極秘情報を漏洩している。

こうして完成した「新しき土」は、8年間のドイツ留学から帰国した青年とその許嫁の物語である。ドイツ人の女性記者を伴って大地震後の日本に戻った輝雄は、満洲への移住を考え、義妹の光子との婚約話を破談にする。しかし、親族や仏僧の働きかけを受けたり、桜や狂言、相撲、能などを見たり、富士山麓の故郷に帰って農作業をしたことで、西洋に心を奪われかけていた自らの過ちに気づき、日本の心を取り戻していく。ところが親族会議が開かれ、結婚話は正式に流れてしまう。嘆き悲しむ光子は花嫁衣裳を持って家を出て、火山に登り、火口に身投げして自殺しようとするが、追いついた輝雄に救出される。二人は結婚を誓い、一緒に満洲に渡る。

ラストシーンでは、輝雄はトラクターに乗って広大な農地を耕している。その傍らにいる光子の腕には赤子が抱かれている。そして銃剣をもった兵士が二人を見守っている。ドイツと同様に「土地なき民」——H・グリム（Hans Grimm 1875-1959）の1926年の小説の題名で、ナチのスローガンに利用された表現——である日本人の若者が、祖国に献身して新たな世界を自力で拓くというテーマは、遅くとも1935年7月以来、ファンクが温めてきたアイデアだった。

当初は一つの脚本に基づきファンクが屋外場面とドイツ語版、伊丹が屋内場面と英語版を担当する予定だったが、途中から両監督の見解が分かれたため、日独で部分的に異なる版が出来上がった。2月1日、大連と奉天で伊丹版が先行封切され、2月3日に東京の帝国劇場で試写会、翌日から一般公開されるも、2月11日からファンク版に差し替えられた。

「新しき土」に対する批評家の反応は芳しくない。紋切り型の皮相な日本理解、あるいはストーリー展開や人物描写の甘さといった内容面への批判に加え、政治宣伝の臭いをかぎとって、防共協定との繋がりを推測する意見もあった。一高生時代の加藤周一（1919-2008）に至っては、寄宿寮向けの『向陵時報』で、「日本の紹介としては外国人の日本観に殆どいくらの進歩も与えないし、芸術的見地からすれば愚にもつかない」とこき下ろしている（『自選集』3頁）。

何よりファンクや川喜多自身が同作を失敗作だと思っていたし、伊丹も、一週間程でファンク版の上映に差し替えられたことについて、「撮影には二倍の時間と労力を費し、私は一年間の精力を意味なく浪費した」と述べ、また「日本語版は私の知らない間に数カット切られたことになっているが、この数カットは数百フィートのまちがいである」とこぼしている（『伊丹万作全集』2、246頁）。さらに山田耕柞は、編集作業によって自身の音楽を台無しにされたとして、「あまりの阿呆らしさにたゞ自失するのみだつた」、「全く出る言葉さへなかつた」と書いている（『山田耕柞著作全集』2、276頁）。

しかし、「新しき土」は一般メディアや大衆の間では大きな話題となり、観客動員数の記録を更新したとする報道もなされた。一躍、人気スターとなった原が、渡欧のために3月10日に東京駅に姿を現した時は、2000人のファンがホームに詰めかけたという。

ドイツでは、一般公開に先駆けて3月23日にベルリンで試写会が催され、ゲッベルス（Joseph Goebbels 1897-1945）やヒムラー（Heinrich Himmler 1900-45）、ルッツェ（Viktor Lutze 1890-1943）、ダレ（Richard Walther Darré 1895-1953）らが列席した。ゲッベルスの1937年3月23日付の日記には、「素晴らしい映像、日本の生活や思考がよく分かる、筋書きもまずまず、しかし耐えられないほど長い。それが作品を損なっている」とある。同月26日には原や川喜多らがベルリンに到着、欧米各地を周り、7月に「凱旋帰国」を果たした。4月16日には、ゲッベルス夫妻と会食している。

しかし、その後は日本映画の国際化、日独映画界の協力は進展しなかった。日中戦争が全面化し、映画産業が縮小するなか、野村浩将（1905-79）が監督となり、アングストが撮影に参加した日独合作映画「国民の誓」（1938）が完成するが、「新しき土」のような反響は得られなかった。そして太平洋戦争が始まると輸送路も遮断され、両国の映画協力は途絶した。ドイツで紹介される日本映画は「ハワイ・マレー沖海戦」（1942）、「海軍」（1943）などの若干の戦争映画に限定され、お雇い外国人の医師を父にもつトク・ベルツ（Erwin Toku Baelz 1889-1945）による日独映画の交流の試みも実を結ばなかった。

1958年、「新しき土」は西ドイツでプロパガンダに当たる部分を取り除いて再上映された。「桜と芸者、火山」の改題からは、日本に対する固定的なイメージが戦後も根強かったことが読みとれる。もっとも日本の側も、ドイツ映画の上映に際して原題にはない「ヒトラー」の語を邦題に入れるのが、今に至るまで常套手段である。製作者の意図や作品の出来栄にかかわらず、映画が観る者の「観たいもの」を映し出す鏡であるのは、「新しい土」の時代から変わりが無い。

(5) 神聖ローマ帝国陸軍中佐「はんべんごろう」の手紙⁽⁶⁾

グレゴリオ暦の1771年7月19日早朝、室戸岬から20キロ弱北上した土佐の佐喜浜に一隻の「異船」が姿を現した。いずれも「身ノ長ケ七尺許」の数名の男たちが小舟に乗り移って浜に着くと、すぐに漁民たちが取り囲んだ。異人は鉄砲、現地民は刀を手にしていたとする記録もあり、緊迫した遭遇だったはずだが、身振り手振りのやり取りを交わした後、水や食糧、塩を与えられた異人たちは、上陸を許されないことを知って、別の港を求め、助言に従い北上していった。その後、異人たちは阿波の日和佐、そして奄美大島を訪れて同様の交渉を繰り返し、8月中旬に日本を去った。

この異人の一行を率いていたのはハンガリー生まれの軍人、ベニョヴスキー（Moritz Benjowski, Benyovszky Móric 1746-86）である。本人による回想記は虚言に満ちており、生年

や生地についての記述、あるいはスロヴァキア貴族の父とハンガリーの大貴族出身の母の間に生まれたという出生譚も疑わしい。

神聖ローマ帝国の軍隊に仕えていたベニョヴスキーは、1765年に相続問題をめぐって親族と対立し、暴力事件を起こして国外に追放された。各地を放浪した後、1768年、ロシア支配に抗するためにポーランド貴族が結成したバル連盟に参加するが、翌年に敵軍の捕虜となる。最初はカザンに流され、脱走を試みて失敗、極東のカムチャツカに送られた。カムチャツカでは学校の建設や地域の開発に貢献したとか、総督の娘と結婚したなどと本人は回顧するが、これも後世の史家は否定している。確かなのは、1771年5月に反乱を起こして総督を殺害し、強奪した船でカムチャツカを脱出したことである。ベニョヴスキーたちは千島列島の新知島に滞在、さらに南下して日本か中国を目指すことにした。しかしその途中で嵐に遭い、食糧も乏しくなったところ、偶然に佐喜浜に漂着したのだった。

鎖国中の日本への上陸を果たせなかった一行はさらに南進し、台湾で島民と争った後、10月上旬にマカオに到着した。彼らはここで船を乗り換え、モーリシャスやマダガスカルを経由して、翌年3月にフランスに到着した。フランス滞在中のベニョヴスキーは高官や将校に取り入り、マダガスカルへの植民計画を進言して認められ、250人程の将兵を伴って遠征に乗り出す。なお、彼は台湾や国後島、奄美大島などに拠点を設けて日本と通商関係を結ぶという案も示したが、これは受け入れられなかった。1774年初頭からマダガスカルでの活動を開始したベニョヴスキーは、現地の住民を懐柔して彼らの王に選出されたが、兵員の多くが死亡し、植民は失敗に終わった。1777年にフランスに戻ったベニョヴスキーは勲章と報奨金を授けられたものの、植民計画の続行は許されなかった。

1778年ごろ、ベニョヴスキーはハンガリーに戻って軍務に復帰し、バイエルン継承戦争に従軍した。その後は独立戦争中のアメリカに渡って一旗揚げようとするも、不調に終わる。1784年、資金を工面し、神聖ローマ帝国皇帝ヨーゼフ二世（Joseph II. 1741-90）の保護を得たベニョヴスキーは再度のマダガスカル遠征に乗り出したが、現地民の抵抗に遭い、さらに同地に派遣されたフランス軍とも衝突して戦死した。死亡状況についても不明な点が多く、しばらくは生存説も流れた。

出鱈目に粉飾された虚像を剥がしたところに表れる実像もまた出鱈目な人物だが、ベニョヴスキーはわずかな日本来航中に長崎のオランダ商館長に宛てて6通の書状を送り、ここでも、大法螺を吹いている。高地ドイツ語によって、「〔神聖〕ローマ帝国陸軍中佐」などの名義で書いた書状の内容は、救助の依頼や、日本人から食糧などの提供を得られたことの報告、マカオへ向かう通告などが中心である。しかしユリウス暦7月20日（グレゴリオ暦7月31日）付の一通は、ロシアのガリオット船二隻、フリゲート船一隻がカムチャツカを出港して日本沿岸を巡航しており、来年には松前と北緯41度38分以南の近隣の島々を攻撃する予定であるという情報を入手したこと、

既に千島列島に要塞が建設されており、弾薬や大砲が準備されていることを告げていた。無論、真つ赤な嘘である。

送り主の正体が分からず、文面の真偽も見当がつかない書状はオランダ商館を混乱させたが、元々が怪しげなドイツ語原文をオランダ語に訳し、さらにそれを幕府に提出するために長崎通詞が日本語に重訳する際に誤訳が生じ、ますます奇怪な文面になった。ベニョヴスキーの一件は『オランダ風説書』に記録され、幕府は事実を秘匿したが、通詞から漏れ聞いた林子平（1738-93）や工藤平助（1734-1801）が著作をつうじて世間に紹介した時には、ベニョヴスキーはロシア帝国の命を受けた「豪傑」で、「日本え押渡り港々エ下縄して、其深さを計りながら、日本を過半、乗廻したる」ことになっていた（『海国兵談』、9頁）。オランダ商館員が「ファン・ベンゴロ」と読んだ彼の名前も日本風に改変され、「ドイツ国」の「はんべんごろう」として知られるようになる。

ベニョヴスキーの嘘と日本側の誤解や先入観が入り混じることで生まれたロシア警戒論は根も葉もない与太話だったが、その後の状況を思えば、あながちの外れでもなかった。それというのも、ベニョヴスキー来日の翌年にカムチャツカ長官に就任したバルト・ドイツ人の軍人ベーム（Magnus v. Behm 1727-1806）は、ペトロパブロフスク・カムチャツキーの港の軍備強化、コサック部隊の訓練、製鉄所や製塩所の開設に務めるとともに、商人たちによる千島探検を奨励し、ウルップ島への要塞設置を——実現はしなかったが——上申しているのである。その後、1778年にアンチーピン（Iwan M. Antipi 生没年不詳）やレベデフ＝ラストチキン（Pavel S. Lebedev-Lastochkin 1741-1800）、1791年にラクスマン（Adam Laxman 1766-1806）、1804年にレザノフ（Nikolai Rezanov 1764-1807）、1811年にゴロヴニン（Vasilii M. Golovnin 1776-1831）と、ロシア人の来日が連続するのは周知のとおりである。

ベニョヴスキーの物語がヨーロッパ各国で広く受容されたことにもふれておく。彼は晩年にフランス語で自伝を書き、出版しようとして叶わなかったが、没後の1790年に英訳が出されたところ、すぐに話題となった。当時から信憑性を疑われていたものの、各国で訳出が相次ぎ、彼の自伝は1894年までに少なくともドイツ語版8種、フランス語版2種、ポーランド語版3種、オランダ語版2種、スウェーデン語版1種、スロヴァキア語版1種、ハンガリー語1888年1種が刊行された。

また、ドイツの劇作家コッツェブー（August v. Kotzebue 1761-1819）やヴルピウス（Christian August Vulpius 1762-1827）の戯曲（それぞれ1791、1794）、フランスのボワエルデュー（François-Adrien Boieldieu 1775-1834）やイタリアのロッシ（Gaetano Rossi 1774-1855）、ハンガリーのドップラー（Franz Doppler 1821-83）のオペラ（それぞれ1800、1831、1847）、ポーランド・ロマン主義の「三大詩人」スウォヴァツキ（Juliusz Słowacki 1809-49）の詩（1841）、娯楽作家ミュールバッハ（Luise Mühlbach 1814-73）の歴史小説（1865）、ハンガリーのヨーカイ（Mór Jókai

1825-1904) の伝記・翻訳 (1888-90)、ポーランド人ジャーナリストのフィドラー (Arkady Fiedler 1894-1985) の旅行記 (1937)、旧西独の初代大統領ホイス (Theodor Heuss 1884-1963) による評伝集 (1947)、あるいは連続テレビドラマ (スロヴァキアとハンガリー、西独でいずれも1975)、テレビ・ドキュメンタリー (ハンガリーで2005、2009)、映画 (ハンガリーで2012)、そしてフランスの小説家リュファン (Jean-Christophe Rufin 1952-) の近作 (2018) まで、ベニョヴスキーを扱った創作は連綿と続いている。稀代の怪人物の人気は衰えていない。

Ⅲ. おわりに

ここまで論じてきたように、四国にはドイツとの繋がりを示す事例が少なくない。

四国の出身者にはさらに、二宮敬作 (1804-62)、三瀬諸淵 (1839-77)、美馬順三 (1795-1825)、高良斎 (1799-1846) といったシーボルト (Philipp Franz v. Siebold 1796-1866) の弟子たち、最初期のドイツ留学生である医師の萩原三圭 (1840-94)、今治藩主の養子でデューリング (Eugen Dühring 1833-1921) に師事し、デューリングやフォイエルバッハ (Ludwig Feuerbach 1804-72)、L・v・シュタイン (Lorenz v. Stein 1815-90) の著作を翻訳した久松定弘 (1857-1913)、法学者の穂積八束 (1860-1912)・陳重 (1855-1926)・重遠 (1883-1951) らの一族、アインシュタインと交友のあった外科医の三宅速 (1867-1945)、哲学者・牧師の三並良 (1865-1940)、哲学者の安倍能成 (1883-1966)、独文学者の山川幸雄 (1868-1922) や片山敏彦 (1898-1961)、ヒトラー (Adolf Hitler 1889-1945) の伝記の執筆やレマルク (Erich M. Remarque 1898-1970)、トラー (Ernst Toller 1893-1939)、ダレの翻訳を行ったジャーナリストの岡上守道 (黒田礼二、1890-1943)、物理学者・文筆家の寺田寅彦 (1878-1935)、経済学者の有沢広巳 (1896-1988)、ダダ運動の芸術家グループ「MAVO」を結成し、グロス (George Grosz 1893-1959) を日本に広めた画家の柳瀬正夢 (1900-45)、軍人の山下奉文 (1885-1946)、1955～65年に日独協会会長を務めた高橋龍太郎 (1875-1967) など、ドイツにゆかりのある様々な人々がおり、また松山と高知の旧制高校で教壇に立ったドイツ人教師たちについても調査が必要である。それらについては、他日を期したい。

注

- (1) 文学を中心対象とした先行研究として、依岡隆児『四国グローカル—日本とドイツの文化交流から』リーブル出版、2015年。
- (2) 南原繁『国家と宗教—ヨーロッパ精神史の研究』岩波書店、1942年；矢内原忠雄『日本精神と平和国家』岩波書店、1946年；南原繁『フィヒテの政治哲学』岩波書店、1959年；清水伸編『逐条日本国憲法審議録』1・2、有斐閣、1962年；南原繁『南原繁著作集』6、岩波書店、1972年；矢内原忠雄『私の歩んできた道』東京大学出版会、1975年；杉田孝夫『南原繁とフィヒテ』『フィヒテ研究』2、1994年；加藤節『南原繁—近代日本と知識人』岩波書店、1997年；矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、1998年；宮田光雄、柳父園近編『ナチ・ドイツの政治思想』創文社、2002年；鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年；苅部直『歴史という皮膚』岩波書店、2011年；山口周三『南原繁の生涯—信仰・

思想・業績』教文館、2012年；川中子義勝『悲哀の人・矢内原忠雄—歿後50年を経て改めて読み直す』かんよう出版、2016年；赤江達也『矢内原忠雄—戦争と知識人の使命』岩波書店、2017年。

- (3) C・バーディック、U・メースナー／林啓介訳『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社、1982年；富田弘『板東俘虜収容所—日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局、1991年；久留米市文化観光部文化財保護課編『久留米俘虜収容所』1～5、久留米市教育委員会、1999～2011年；瀬戸武彦『青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006年；田村一郎『板東俘虜収容所の全貌—所長松江豊壽のめざしたもの』朔北社、2010年；高橋輝和『丸亀ドイツ兵捕虜収容所物語』えにし書房、2014年；鳴門市ドイツ館史料研究会編『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞「ラーガーフォイアー」』愛媛新聞社、2019年；森清治『ドイツ兵捕虜の足跡—板東俘虜収容所』新泉社、2019年；大津留厚『さまよえるハプスブルク—捕虜たちが見た帝国の崩壊』岩波書店、2021年；梶原克彦編『海南新聞』松山俘虜収容所関連記事集成』愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」、2020～2021年；*Die Gartenlaube: illustriertes Familienblatt*, Leipzig 1853-1944; Stadt Naruto (Hg.), *Die Baracke: Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan*, 2 Bde., Naruto 1998; Susanne Kuß, Bernd Martin (Hg.), *Das Deutsche Reich und der Boxeraufstand*, München 2002; Mahon Murphy, *Colonial Captivity during the First World War: Internment and the Fall of the German Empire, 1914-1919*, Cambridge 2018.
- (4) 長井長義／青井石子編・出版『長井博士書簡抄』、1929年；金尾清造／長井長義伝編纂委員会・長井長義先生顕彰会編『長井長義伝』日本薬学会、1960年；飯沼信子『長井長義とテレゼー—日本薬学の開祖』日本薬学会、2003年；長井長義／徳島大学薬学部長井長義資料委員会編・出版『長井長義ベルリン通信』、2005年；の原博武『この人長井長義』ブッキング、2009年；ノーマン・オーラー／須藤正美『ヒトラーとドラッガー—第三帝国における薬物依存』白水社、2018年；熊野直樹「ベルビチンと独日関係—第二次世界大戦期を中心に」『法政研究』89、2022年；Annette Lepenies, Ikuta Chiaki (Hg.), *Eine japanisch-deutsche Gründergeschichte: Dr. phil. Wilhelm Nagayoshi Nagai (1845-1929)*, Düsseldorf, Berlin 2000; Wolfgang U. Eckart, Alexander Neumann (Hg.), *Medizin im Zweiten Weltkrieg: Militärmedizinische Praxis und medizinische Wissenschaft im „Totalen Krieg“*, Paderborn 2006; Robert Jütte, Wolfgang U. Eckart, Hans-Walter Schmuhl, Winfried Süß, *Medizin und Nationalsozialismus: Bilanz und Perspektiven der Forschung*, Göttingen 2011.
- (5) 伊丹万作『伊丹万作全集（新装版）』2、筑摩書房、1973年；山田耕筈／後藤暢子・団伊玖磨・遠山一行編『山田耕筈著作全集』2、岩波書店、2001年；千葉伸夫『原節子—伝説の女優』平凡社、2001年；海老坂高「日独合作映画『新しき土』をめぐる」1～4、『帝京大学外国語外国文学論集』9、『帝京国際文化』17～19、2003～06年；加藤周一／鷲巣力編『加藤周一自選集』1、岩波書店、2009年；中田整一『ドクター・ハック—日本の運命を二度にぎった男』平凡社、2015年；中川拓哉「日独合作映画『新しき土』の政治的および文化的使命について」『ドイツ文学研究』47、2015年；上田浩二『「新しき土」』1～3、『獨協大学ドイツ学研究』70・72・77、2016・17・20年；瀬川裕司『「新しき土」の真実—戦前日本の映画輸出と狂乱の時代』平凡社、2017年；Elke Fröhlich, *Die Tagebücher von Joseph Goebbels*, München 1993; Janine Hansen, *Arnold Fanck's Die Tochter des Samurai: Nationalsozialistische Propaganda und japanische Filmpolitik*, Wiesbaden 1997; Christin Bohnke, *Postcolonial Theory Reconsidered: Discourses of Race, Gender, and Imperialism in the German-Japanese Realm*, PhD Thesis (University of Toronto), 2017.
- (6) 林子平『海国兵談』岩波書店、1939年；沼田次郎「ベニョフスキー（日本名はんべんごろ）の日本来航時に残したドイツ語書翰について」『蘭学資料研究会・研究報告』122号、1962年；木崎良平「わが国におけるロシア研究の胎動—「ベニョフスキー事件」を中心として」『鹿大史学』13、1965年；沼田次郎「ベニョフスキー（いわゆるハンペンゴロウ）事件とその影響—書翰の紹介を中心として」森博士還暦記念会編『対外関係と社会経済—森克己博士還暦記念論文集』塙書房、1968年；沼田次郎・水口志計夫編訳『ベニョフスキー航海記』平凡社、1970年；渡辺京二『黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志』洋泉社、2010年；Maurice Benyovszky, Samuel Pasfield Oliver (ed.), *Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky*,

四国地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

London 1893; George A. Lensen, *The Russian Push toward Japan: Russo-Japanese Relations 1697-1875*, New York 1971; Katalin Blaskó, Alois Woldan (Hg.), *Moritz Benjowsky: ein (mittel) europäischer Held: Materialien der internationalen wissenschaftlichen Konferenz, Wien, 22.-26. Mai 2019*, Berlin 2021.

表：四国地方に存する日独関係の史跡一覧

史 跡 名	住 所	備 考
南原繁の胸像	香川県東かがわ市南野 相生小学校跡	Ⅱ (1) に関連。
南原繁の歌碑	香川県東かがわ市坂元 大坂峠展望台	Ⅱ (1) に関連。
矢内原忠雄の碑	愛媛県今治市松木349-1 今治南中学校	Ⅱ (1) に関連。
矢内原公園	東京都目黒区駒場3-5-19	Ⅱ (1) に関連。
鳴門市ドイツ館	徳島県鳴門市大麻町桧東山田55-2	Ⅱ (2) に関連。周辺に収容所跡地、ドイツ兵慰霊碑、ドイツ橋、安藝家バラック、旧富田畜産部牧舎（桧野神ノ北40）など。
松江豊寿大佐の住居跡	徳島県徳島市藍場町 2	Ⅱ (2) に関連。
ドイツ兵の墓	徳島県徳島市八万町東山 眉山	Ⅱ (2) に関連。
本願寺塩屋別院	香川県丸亀市塩屋町4-6	Ⅱ (2) に関連。
丸亀陸軍墓地	香川県丸亀市土器町東6-52	Ⅱ (2) に関連。ドイツ兵の墓。
長井長義生誕の地	徳島県徳島市中常三島町2-14-2	Ⅱ (3) に関連。周辺に長井長義通り。
長井長義像	徳島県徳島市庄町1-78-1 徳島大学	Ⅱ (3) に関連。敷地内に長井記念ホール。
長井記念薬学資料室	東京都渋谷区渋谷2-12-15 日本薬学会長井記念館 2 階	Ⅱ (3) に関連。レストラン「テレーゼ」を併設。
大日本住友製薬史料展示スペース	大阪府大阪市中央区道修町2-6-8 大日本住友製薬	Ⅱ (3) に関連。
花見山・心の手紙館	徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦大毛234-35	Ⅱ (3) に関連。長井亜歴山の家。
丹下梅子銅像	鹿児島県鹿児島市金生町 3	Ⅱ (3) に関連。近隣に生誕地（金生町 5）。他に平林寺の墓と碑（埼玉県新座市野火止3-1-1）。
伊丹十三記念館	愛媛県松山市東石井1-6-10	Ⅱ (4) に関連。
鎌倉市川喜多映画記念館	神奈川県鎌倉市雪ノ下2-2-12	Ⅱ (4) に関連。
円谷英二ミュージアム	福島県須賀川市中町4-1	Ⅱ (4) に関連。
須賀川特撮アーカイブセンター	福島県須賀川市柱田中地前22	Ⅱ (4) に関連。
佐喜浜	高知県室戸市佐喜浜町	Ⅱ (5) に関連。ベニョヴスキーは日和佐（徳島県海部郡美波町奥河内弁才天）にも上陸。
林子平の碑	宮城県仙台市青葉区川内26	Ⅱ (5) に関連。近隣に「林子平之像」（本町3-8）、墓（子平町19-）、「ゆかりの地」（若林区表柴田町44-17）。塩釜市に林が考案した日時計（一森山1-1）。
乃木館（陸上自衛隊善通寺駐屯地資料館）	香川県善通寺市南町2-1-1	山下奉文は1941年にドイツを視察、ヒトラーと会見。他に陸上自衛隊岩手駐屯地史料館（岩手県滝沢市後268-433）、青葉園（埼玉県さいたま市西区三橋5-1505）など。

アインシュタイン 友情の碑	徳島県美馬市穴吹町三島舞中島1443 光 泉寺	三宅速の墓に併設。九州大学に三宅速文庫。
美馬順三の碑	徳島県阿南市羽ノ浦町宮倉沢田 以和々 貴霊園	美馬は鳴滝塾の塾頭を務めた。
愛媛県美術館	愛媛県松山市堀之内	柳瀬正夢の作品を所蔵。
高浜虚子住居跡	愛媛県松山市一番町1-6-2	高浜虚子（1874-1959）は1936年に渡独。弟子の 山口青邨（1892-1988）や高野素十（1893-1976） もドイツ留学の経験がある。他に鎌倉虚子立子記 念館（神奈川県鎌倉市二階堂231-1）、虚子記念文 学館（兵庫県芦屋市平田町8-22）、小諸高濱虚子 記念館（長野県小諸市与良町2-3-24）など。
穂積兄弟生誕地	愛媛県宇和島市京町 1	近隣に穂積橋（新町2-3-8）。
安倍能成の胸像	愛媛県松山市持田町2-2-12 県立松山東 高等学校	安倍は松山出身。
文化交流ヴィラ高 橋邸	愛媛県喜多郡内子町内子2403	高橋龍太郎の実家。
「坊ちゃん列車」	愛媛県松山市梅津寺町1386-5 梅津寺公 園	ドイツ製の機関車。小説『坊ちゃん』に登場。国 内に現存する最古の軽便鉄道の車両。
旧制松山高等学校 講堂「章光堂」	愛媛県松山市持田町1-5-22	第一次世界大戦で捕虜生活を経験したヴェークマ ン（Oskar C. v. Weegmann 1879-1960）や、アル フレート・ボーナー（Alfred Bohner 1894-1958） らが教えた。
旧制高知高校歌碑	高知県高知市浦戸 6	ヘルマンとアルフレートの兄弟であるゴットロー ブ・ボーナー（Gottlob Bohner 1888-193）や、エー ファースマイアー（Bernd Eversmeyer 1906- 98）が教えた。
「後藤象二郎先生 誕生之地」碑	高知県高知市与力町5-17	1866年、クニフラー商会と土佐藩の間で契約不履 行が生じた際、後藤象二郎（1838-97）が交渉を 担当。他に後藤象二郎寓居跡記念ギャラリー（京 都府京都市中京区大黒町59-10）、後藤象二郎邸跡 石碑・看板（長崎県長崎市金屋町2-4）。
ジョン万次郎資料 館	高知県土佐清水市養老303	ジョン万次郎は独仏戦争の視察団に同行、病気で ロンドンに待機。近隣に生家（中浜）。他に漂流 出航の浦（土佐市宇佐町宇佐）、上陸の地（沖縄 県糸満市大度337）。
有沢広巳の胸像	東京都小金井市梶野町3-7-2 法政大学 小金井キャンパス西館 1 階	有沢は高知出身。
京都府立医科大学	京都府京都市上京区梶井町466	萩原三圭が初代院長。
寺田寅彦記念館	高知県高知市小津町4-5	高知県立文学館に寺田寅彦記念室（丸ノ内1-1- 20）。
高知県立牧野植物 園	高知県高知市五台山4200-6	牧野富太郎（1862-1957）はドイツの植物学者エ ングラー（Adolf Engler 1844-1930）とともに、 日光で採集活動。他に牧野富太郎ふるさと館（佐 川町甲1485）、練馬区立牧野記念庭園（東京都練 馬区東大泉6-34-4）、牧野標本館（東京都八王子市 南大沢1-1）など。